シベリア出兵

寺前信次

シベリア出兵の目次

シベリア出兵
概　　要 ・・・・・・1
尼港事件 ・・・・・・2
シベリアの地図 ・・・・・・3
チェコスロバキア軍団 ・・・・・・3
出兵前後の日本陸軍 ・・・・・・4
出兵論登場の背景 ・・・・・・5
出兵慎重論の変化 ・・・・・・5
シベリア出兵発動直前の状況 ・・・・・・6
シベリア出兵の発動の状況 ・・・・・・7
シベリア出兵は戦争か如何か？ ・・・・・・9
シベリア出兵のあとがき ・・・・・10

シベリアの地誌
シベリアとは ・・・・・12
イルクーツク ・・・・・13
バイカル湖 ・・・・・13
ウラン・ウデ ・・・・・16
チタ ・・・・・16
ハバロフスク ・・・・・16
ウラジオストク ・・・・・18
その他の事項
シベリア鉄道 ・・・・・19
シベリア抑留 ・・・・・20

シ ベ リ ア 出 兵

出兵の概要

「シベリア出兵」は、１９１７年（大正６）のロシア革命で成立したソビエト政権を打倒するための「干渉戦争」であった（日本軍は１９１８年に出兵し１９２２年に撤退）。

第一次世界大戦末期、最初シベリアへの共同軍事干渉計画をたてたのはフランス、イギリスで、日米両国軍によるシベリア鉄道の共同占領や、ウラジオストクにある６０万トンの軍需品をドイツの手に渡さないために、日本軍を主力とする連合軍の兵力派遣を提議した。

〔第一次世界大戦はドイツ・オーストリア・イタリヤ・トルコ・ブルガリアなどの同盟国と、イギリス・フランス・ロシア・日本・アメリカ・及び三国同盟を破棄したイタリアなどの連合国との対戦で、１９１４年６月から開戦した。１９１８年１１月、ドイツの降伏で同盟国側が敗北し、翌年のパリ講和会議でベルサイユ条約が締結された〕

兵力派遣の提案を受けた日本側でも出兵論が高まったが、日本政府の態度は連合国の出方を見守るという方針であった。革命直後から寺内正毅内閣は、ロシア革命の圧殺、東部シベリアへの日本の勢力拡大、中国本土への圧力強化を企図しており、特に陸軍参謀本部では「居留民の保護」を名目に、沿海州から北満州（中国東北部）への日本軍派遣を計画していた。

政府内の出兵賛成論者は元駐露大使の本野一郎外相で、これに反対したのは外交調査会のメンバーである原敬や牧野伸顕であり、ロシア革命の日本への影響を憂慮する寺内首相や元老の山形有朋もアメリカの出方を重視し、出兵には慎重であった。

１９１８年１月、連合国による日本軍艦のウラジオストク派遣要請があり、日英両国は居留民保護のためウラジオストクへ軍艦を派遣した。日本の軍艦は１３日と１７日に、イギリスの軍艦は１４日に到着した。

〔日本軍艦のウラジオストク入港は居留民保護を名目にしていたが、、ボリシェヴィキ（多数派の意味で、ロシア社会民主労働党の左派）をはじめ、市民から強い反発の感情をもって迎えられた。〕

たまたまウラジオストクの石戸商会が襲われ、３名の日本人が殺傷される事件が発生（４月４日）すると、５００余名の日本陸戦隊は５０名のイギリス陸戦隊員とともに同市警備の任務に就いた。これが「事実上のシベリア出兵の軍事干渉の第一歩」である。

ソビエト政府（ソビエト社会主義共和国連邦の略）は１８年３月にドイツとブレスト・リトフスク条約（後記）を結び、第一次世界大戦の局面に大変化が生じた。

〔ブレストはソ連の白ロシア共和国の都市で、ポーランドとの国境に位置している。ブレスト・リトフスク条約とは、第一次世界大戦末の１９１８年３月、ソビエト新政権がドイツ・オーストリアと締結した講和条約。国内復興を目指すソビエト政権は連合国に和平を提案したが、拒否されたため、単独で講和。広大な領土を失ったが、ベルサイユ条約で無効となった〕

大戦中オーストリアの支配下にあって、ロシア軍と戦ったチェコスロバキア軍の多くはロシアに投降し、ロシアではチェコ軍団として対ドイツ戦に使用されていた。革命後もチェコ軍はドイツと戦おうとし、シベリア経由でヨーロッパ戦線に向かうことになった。

５月ウラル山中のチェリャビンスク駅で、ドイツ・オーストリア軍の捕虜とチェコ軍団との衝突事件がおこり、これがアメリカその他に、チェコ軍団がシベリア各地で殲滅されかかっていると誇張して伝えられた。

アメリカ・ウィルソン大統領はそれまでの慎重な態度を変えて、日米共同でシベリアへ派兵する方針を示した。そしてウラジオストクに日米同数の各７０００名の陸軍派遣と、チェコ軍

の救援目的を達成しだい撤兵することを日本に提議した。

日本陸軍はアメリカの「限定出兵」提案を喜ばず、「自主出兵」を貫こうとしたが、結局、アメリカの提案に同意しながらも、自主的行動をとる含みを残した妥協的回答を送った。アメリカは日本の出兵数は１万～１万２０００以下であることを念を押した。

こうして８月２日、日本は共同出兵の宣言（アメリカ合衆国の提議に応じシベリアにいるチェコ軍団救援のために出兵する）を発し、１２日に日本軍、１９日にアメリカ軍が、ウラジオストクに上陸を開始する。

シベリア出兵は日本、アメリカのほかにイギリス、フランス、イタリア及びカナダ、中国がそれぞれ小部隊を派遣して連合国による共同行動という形をとった。しかし共同行動はうまく運ばず、日本軍が緊急の救援を求めてもアメリカ軍はこれを傍観する事態も生じ、日本軍が日米間の合意を無視して大兵を派遣（１０月中旬までに約７万３０００を派兵）したのに対し、アメリカは厳しく抗議した。

日本軍はシベリア各地に存在した多くの反革命政権にてこ入れし、西シベリアのオムスクで生まれた「コルチャーク政権」は一時は優勢で連合国も援助したが、２０年１月に崩壊した。

この状況と干渉戦争批判の声に押されイギリス、フランスは干渉中止の方針を明らかにし、ついでアメリカもこれにならい、１９２０年１月９日、出兵打ち切りの方針を日本に通告した。

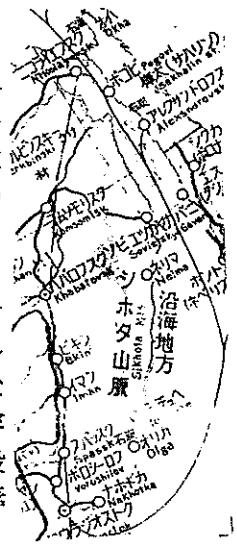
ところが日本は、居留民の生命財産の安全が保証されず、過激派の勢力が朝鮮・満州に波及する恐れがあるとして、３月２日の閣議で出兵目的の変更と守備地域の縮小とを決めた。

この新方針を実行するやさきに発生したのが「尼港事件」（ニコウジケン）である。これに対する保障占領の名目で日本は７月３日、北樺太への出兵を開始した。（尼港事件は別記する）

しかし世界各国、日本国内の兵反対論も無視できず、また財政的困難でも歴代政府（寺内　原、高橋是清内閣）は苦しみ、加藤友三郎内閣（１９２２年６月成立）はついに撤兵を決定し、２２年１０月２５日、最後の日本軍はシベリアから引き揚げた。なお北樺太の保障占領は続けていたが、２５年１月「日ソ基本条約」の調印後、５月に撤兵を完了した。

こうして日本のシベリア出兵は前後８年間に戦費約１０億円、死者３５００名を数え、ソ連や各国からの不信を買い、何ら得るところなしに無惨な失敗に終わった。

『尼港事件』（右の地図参照）

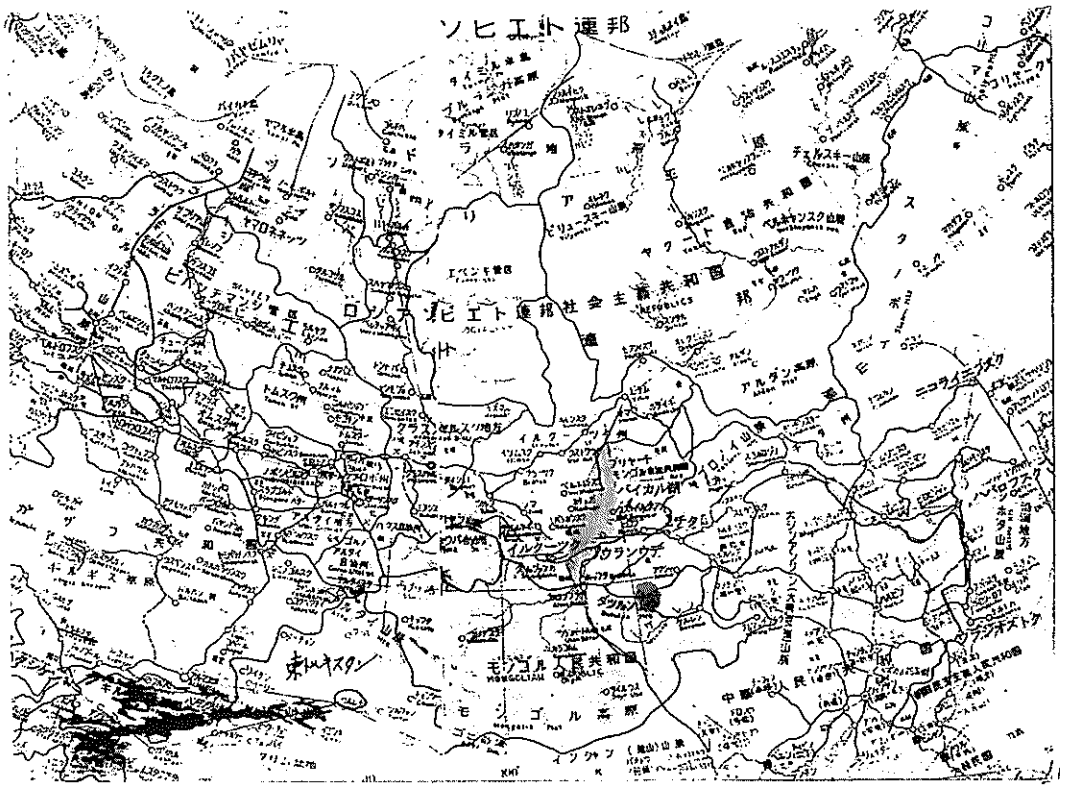


これはシベリア出兵中の１９２０年３～５月に尼港（ニコラエフスク・ナ・アムール）で発生した事件である。同市はソ連極東のアムール川河口に近い漁業都市で、日本領事館も置かれていた。日本軍はここを１９１８年９月占領し、２０年の冬には日本人居留民約３８０名、陸軍守備隊１個大隊、海軍通信隊約３５０名がいた。たまたま同年１月トリャピーチィンの率いる約４０００名のパルチザン（ゲリラ）部隊が日本軍を包囲した。

衆寡敵せず日本軍は敗れ、パルチザンとの間で停戦協定を結んだ。ところが３月１１日武器引渡しを要求されたのを機に日本軍は奇襲をかけ、一般人もこれに加わった。結局、日本人側は大半が戦死、残った者も降伏し投獄された。この間、石田虎松副領事一家は自決した。やがて解氷期となり日本の救援隊が向かうと、到着前の５月下旬パルチザン側は監獄に収容中の日本人俘虜を虐殺し、市街を焼き払い、市民約８０００名の半数を殺害した。この「尼港の惨事」は日本に大々的に宣伝され、元寇以来の国辱として、シベリア駐兵の必要を説く軍部に利用された。

日本政府は７月３日、同事件の解決の保障として北樺太の占領を宣言し、同地への出兵が行われた。この尼港事件は、その後の日ソ国交回復交渉の難点となった。なお、トリャピーツィンは後にソ連に逮捕され、人民革命裁判所の裁判を経て７月に死刑が執行された。

シベリアの地図



チェコスロバキア軍団

チェコスロバキア軍団問題とはどのような経路をたどって発展し、どのような性格を担っていたのであろうか。（チェコとスロバキアは別種の民族で、現在は各々独立しており、私は平成６年の１９９４年に訪れている）

当時のチェコ人とスロバキア人は、多年オーストリア帝国の圧制の下で早くから民族意識に目覚め、民族的自由を獲得する運動を継続していたが、第一次世界大戦の発生は民族的独立を達成するための得難い機会として彼らの眼に映った。

そこでロシアとの戦争に動員された両国民は続々とロシア側に投降した。その数はすでにロシア領土内に居住して民族解放の戦いに従事していたチェコ人、スロバキア人と合わせて五万人にも達じていた。パリにあって民族解放運動を指揮していた指導者は、このロシア軍に投じた俘虜を中心に、ロシア軍の内部にチェコ軍団を組織することを計画し、やがて帝政ロシアの崩壊とともにこの計画は実行し、チェコ軍団の担当としてウクライナの一戦線が与えられた。

ソビィエトとドイツとの休戦協定が成立した翌日の１７年１２月１６日、チェコ国民議会（在パリ）とフランス政府との間には、新しい事態に処して、チェコ軍団をフランスの最高司令官の下に属せしめ、これをフランスに転送して西部戦線の戦闘に従事する協定が成立した。

翌年２月１６日には、すでにトロツキー（ロシアの革命家）方式により復員を開始していたソヴィエト軍のウクライナ方面指揮官は、チェコ軍団の戦線離脱、フランスへの移動を与える。３月１５日には、ソヴィエト人民委員会議は、チェコ軍団がシベリア経由でロシアを去るのを許容することに決定し、チェコ軍団の即時ウラジオストクへの進行と反革命分子の攻撃に備えて、一定量の武器携行を許容する協定が成立した。

かくてチェコ軍団は４月下旬のウラジオストク到着部隊を皮切りに、４月末には六千名、５月末には一万名のチェコ部隊が同市に姿を現した。ところでシベリアのボリシェヴィキ（ロシア社会民主労働党左派）の間には、チェコ軍のシベリアへの出現が反ボリシェヴィキ勢力を鼓舞することを危惧して、チェコ軍の東進を最初から好まない空気があった。

チェコ軍団が露国と満州の国境から進撃を始めシベリア鉄道を分断する形勢を示したとき、シベリアのボリシェヴィキの危惧は一層増大した。外務人民委員会はチェコ軍団を輸送中の全部の列車の進行中止を指令した。ところがその指令を撤回し、フランス代表との了解にもとづいて、オムスク東方地区チェコ軍の東進継続と、オムスク西方地区のチェコ軍の北への針路変更を指令する。チェコ部隊の指揮官は次々に変わる指令に困惑し、問題の真偽を確かめるためにモスクワに引き返したりした。

チェコ部隊は焦燥と不満の空気に包まれていた。　中央のボリシェヴィキの承認をえて行動しても、中央の指令は地方にまで必ずしも徹底せず、沿線の各地で許容限度内の武器をさらに放棄するよう要求される。その上、輸送手段の貧困はドイツ俘虜の西方への優先的輸送に拍車をかけられ、沿線の各駅で立ち往生を余儀なくされる。停車中のチェコ兵士には赤軍へ加入するようにとのボリシェヴィキの宣伝活動が激烈になる。

そればかりか列車の進行停止指令があり、目的地変更の例もある。チェコ将兵は列車の中で完全に苛立ち、小さな事件にも点火されて大事件を爆発しかねない心理状態に陥っていた。

このようにチェコ軍団は混乱の中にあったのである。

出兵前後の日本陸軍

ロシア革命がボリシェヴィキ政権の樹立、そしてボリシェヴィキ政権のロシア全土の掌握という段階に達してくると、陸軍部内では「居留民保護」のためにシベリアへ兵力を派遣するための計画が立案され始めた。

しかし、このように「居留民保護」がシベリア出兵の大義として考えられていた時期は、陸軍に於いては短かった。１９１８年になると大義は「居留民保護」ではなく、シベリアにいる反革命派の擁立によるシベリアのロシアからの分離、すなわち「シベリア独立」へと移行した。「シベリア独立」への路線変更には、対外的に慎重な態度を取りつづけた当時の寺内首相が強い関心を示していた。陸軍の意見は、日本のとるべき政策はシベリアにいる「穏健分子を支援糾合して独立せしむ」と述べた上で、一旦支援を決めたならば経済的援助だけでなく、軍事力の面での支援もすること、出兵発動時には中国の協力を得られるようにすること、好ましいロシア側の人物を物色すること、そして在留邦人の有力者に仲介をさせること、が書かれていた。

この時期以後、陸軍側の立て始めた出兵の計画には、「シベリア独立」の色彩が色濃く出始めた。当時の参謀本部の編纂した公式戦史「シベリア出兵史」において、「極東ロシア領に対する出兵計画」という題でまとめられている三つの意見書、「沿海州増加は兵計画」、「ザバイカル州方面に対する派兵計画要領」、総称と同名の「極東ロシア領に対する出兵計画」が作成された。

この意見書のうち、最初の意見書だけは出兵目的に「居留民保護」と「シベリア独立」の目的が併存しているが、あとの二つの意見書には、「居留民保護」目的が存在しなかった。

出兵論登場の背景

シベリア出兵論は、「ドイツ・オーストリア東漸論」のみならず、ロシア救援論や連合国への貢献論、中国政策との関連論など、さまざまな正当化の論拠を持ち始めていた。

実は、日本の現状に対する危機感はロシア革命以前から語られていた。徳富蘇峰は１９１６年に出版した「大正の青年と帝国の前途」で、現状を次のように「帝国の危機」と呼んでいた。

『日本全国を見渡すと我が周囲は世界大戦に従事し、生死岩頭の苦痛を満喫しつつあるに拘わらず、我が国民のみは戦場の中心から遠ざかりつつある為に、恰も国民的放心期、国民的甘睡期に入りつつあるものに似ていた。彼等は世界に第三者あるを忘れ、自分天狗の独りよがりを恣にしつつあり。若し此の儘にて経過せんか、世界大戦の終結に到りて其の禍を被る者は、この油断国民を以って最とせざるべからず。吾人は之を思うと憂慮に耐えない』と。

つまり殆んど戦争を体験せず、戦時景気に酔っている日本国民には、大戦終結後になって政治的経済的破綻が来る可能性は大なりである、と述べている。彼が呼びかけた日本の新時代は、もはや幕末はおろか、日清戦争さえ記憶としては共有しない世代になりつつあった。

このような第一次世界大戦参加国としての日本の現状に対する危機感は、シベリア出兵問題という現実の政治課題に対して噴出したのである。出兵論の中で、「幸いなる哉、今やドイツ勢力の東漸が日本帝国国民の覚醒を促した」と述べている。

出兵慎重論者の変化

大戦後を見越して出兵に批判的な者の中にも自覚が芽生えてきた。出兵慎重論者として知られる「原敬」は、１９１７年秋に「戦後の経営は実に戦争以上と言わざるべからず」と述べた。

また「目下の日本は戦場より遠ざかっている。欧州戦争のことは何処かの事を聞くように国民は耳にも慣れ、何ら意に介しない風のあるのは戦争が長びいた為であろう。戦争のために一方には国内に利益を得る者が沢山でており、彼の成金と称する者が続出している。外貨が入ってきて国民の懐具合が好くなり、経済界は潤っている。これでは国民が戦争を対岸の火事とし、戦争を忘れることは当然である」と、述べている。

さらに「我が国民はややもすれば戦争を忘れ、戦争を対岸の火災視しているから其の注意を怠り、一朝何等かの問題に遭遇すると、寝耳に水のような狼狽をする観があるのは、遺憾千万なことと謂わねばならない」と語り、国民に対して、日本が戦争当事国であることを忘却していることに警告した。

ロシア革命などの激動の中で「原敬」は、「吾人の測知し得べき限りにおいて、戦後必ず世界の国力競争は益々激甚を加えることは疑いなく、それに対処する必要がある」と警告している。原と出兵論者は打開策こそ大きく異なるが、大戦後の日本が経済的な国力や、国際政治上の立場などの面で落伍するかも知れないという危機感を、両者は等しく持っていた。

そして原は、この点では出兵論者と同様に、日中関係を改善することに打開策を求めている。大戦の進行で世界経済の情勢が「自給自足」の必要性に向っていることを強調し、日中親善を説いている。即ち鉄の自給、綿花羊毛の自給等である。

しかしながら出兵論者と出兵慎重派の政治家は、根本的に異なっていた。新しい国際秩序の覇者となりつつあるアメリカに対して、一定の強調姿勢を示すことができ、旧来の領土拡張的な帝国主義路線からの転換を抵抗なくなしうるかどうかが、出兵問題に対する最終的な、そして決定的な差になったのである。皮肉なことに原をして、「日米共同」形式のシベリア出兵に踏み切らせてしまったのである。

シベリア出兵発動直前の状況

出兵論者と出兵批判者（慎重派）の間には、「シベリアに対する軍事力行使の必要性の有無」という一点以外、殆んど時代認識や解決策への相違はなかったようだ。第一次世界大戦後の日本が国際社会で、生き残るための現状打破へ向けた対中政策の遂行や、政治経済体制の刷新に異論はなかった。問題はそのための契機として現実に軍事動員をかけて、緊張状態を作り出す必要があるかどうかだったのである。

アメリカとの「強調出兵」の形式が整えられたものの、日本が「全面出兵」の立場を譲ったわけでも、アメリカが「限定出兵」の線を崩したわけでもなかった。基本的立場の対立を糊塗した上での、「見せ掛けの合意」が日米間に存在したに過ぎなかった。この「合意」の本質は直ちに暴露し、その点をめぐって日米間に紛糾が発展してゆくのは当然の推移であった。

「日本陸軍外交」に対する「原敬」の杞憂は杞憂でなかった。日本軍は兵力制限を無視するであろうといったアメリカの予測は的を射ていた。日本陸軍は直ちにウラジオストク派兵を、大規模なシベリア派兵に転化する計画に乗り出し、巧妙に温存された「了解事項」を楯に、「合意」に独自の解釈を施し始める。

日本陸軍は「全面出兵」の実行に着手する前に、予備工作として北満州への派兵を実施することを決定する。北満州派兵は、「全面出兵」の際の根拠地の確保、戦闘準備態勢の確立を意味しただけでだなく、チェコ軍の北満州通過にあらかじめ備える態勢として、その意義の重要性が捉えられている。しかも、チェコ軍に備えるというのは、協力提供を意味するのではなく、チェコ軍に伴って北満州に浸透してくる連合国勢力に対抗して、あらかじめ北満州地域に日本の排他的支配権を確立しておくことを意味していた。

「チェコ軍の中東鉄道通過は、北満州方面に与国の勢力を大いに輸入拡張する結果に陥り、ひいては将来、連合出兵の場合にあたり、均等主義のもとに北満州方面にも列国軍隊伴立の不利な状況を来す恐れがある」との理由で、チェコ軍の北満州通過を拒否すべしとの意見書を提出した。それほど日本は満州を独占したかったのである。

これによっても陸軍の観点においてチェコ軍救援とは、シベリア出兵の単なる口実に過ぎなかったことが判明される。そして、その勧告の採用されない形勢に、チェコ軍の北満州通過に先手を打って、日本軍を同地方に進駐させることに方針を変更した。

日本軍の北満州派兵を正当化するための法的根拠はすでに存在していた。「日華軍事協定」がそれである。協定を発動する理由として上げられたのは、セミョーノフ（ロシアの反革命指揮者）の軍隊の敗退に追随して、満州領内に侵入してきたと報ぜられるドイツ・オーストリア俘虜を交えたボルシェヴィキ軍の行動であり、それによってもたらされた「国防上の重大な危険」であった。

「セミョーノフ軍はハイラル（ソ満国境の町）に向かって退却中で、過激派軍は国境を越えて侵入してきた。それにも拘わらず、中国軍は武力をもって撃退せず、これと妥協している。それほど中国軍の戦意はなかった。満州里（ソ満国境の町）の日本人居留民２５０名は、財産を捨ててハイラルに引き上げている」。

参謀本部から、中国陸軍当局に日華軍事協定の発動を要求すべしとの訓電が、在華日本大使館に飛んだのは１９１８年7月２４日で、日本の対米回答がアメリカ国務省に届けられたのと同日であった。

シベリア出兵の発動の状況

１９１８年8月２日に日本政府の「出兵宣言」が発せられ、シベリア出兵は実行段階に突入したのである。

８月９日夜、満鉄沿線駐屯の第７師団の全部に動員令は下り、政府は８月１３日、満州里に対する出兵を正式に宣言した。『日本軍隊の移動は支那の同意及び協力を以って支那領土内に限り之を行うものにして、一時応急の要を了すれば直ちに撤退すべく、従って今次のウラジオストク又は露国領土内に於ける軍事行動とは全く性質を異にして・・』と説明した。

第１２師団（九州小倉編成）がウラジオストクを、第７師団（北海道旭川編成）が北満州を殆んど同時に占領した。段階は次に進められねばならなかった。それはウラジオストク方面への増援軍の派遣と、ザバイカル方面への「シベリア出兵」でなければならなかった。

新しい軍事行動は、国内的には派遣軍結成とともに自動的に威光を増大する「統帥権独立」条項によって支えられ、国際的＝対米的には、「了解条項」によって正当化の根拠を提供されていた。計画は予定の行動ででもあったかのような精密さで進められた。６月中旬、参謀本部で作成した「シベリア作戦要領」は次のようであった。

『①沿海州に１ケ師団を基幹とする兵団を出し、凡そ３ケ月後、ブラゴヴェチェンスク（満州の東部国境）を占領し、更に西進して全黒竜江州（満州北部の省）を占領する。②又２ケ師団を基幹とする兵団をバイカル州に進入せしめ、約半年後にバイカル湖畔に出て、ロシア穏健分子をして西部シベリアに進出せしめる基礎を作る。等』

以上の兵力を以って目的を達成することは充分なりと雖も、遠き将来に於いてシベリア鉄道の交通確保のため、其の兵力を３ケ師団半、尚不足なときには更に３ケ師団を増加する必要があると計画している。

作戦が上記のように進むきっかけを提供したのは、チェコ軍司令官・ディトリックスの連合国に対する増援軍派遣の訴えであり、大谷喜久蔵シベリア派遣軍司令官の本国への増援軍要請の具申であった。ディトリックスは連合国政府に次のように訴えた。

『チェコ軍の情勢は日々に危険に陥り、これに反して敵軍は日々に増大している。６週間後に迫った冬季に入るに先立ってチェコ軍は、その目的すなわち西部シベリアのチェコ軍をドイツ・オーストリアの毒手から逃れさすという目的を貫徹するのでなければ、これはチェコ軍の敗滅を意味することになる。この目的は、ただ与国が行動の範囲をハバロフスク方面に局限することなく、チェコ軍のイルクーツクへの進出に対し、充分な軍事上の援助を与える場合のみ、よく達成することができる』と。

参謀本部は大谷司令官からも増援要請を受け取っていた。大谷司令官は８月１９日、先ず、「現在の兵力では、ハバロフスク付近で、前面の敵と対峙するだけでもやや危険の感があるだけでなく、爾後における軍の作戦行動のためには到底不十分である」として、第１２師団の残部のウラジオストク方面への増援を求め、続いて翌２０日、列国軍事会議の同意に基ずくものとして、５個師団をザバイカル、ハバロフスク両方面に作戦させることを次のように要請している。（３頁地図参照）

① 敵兵力は満州里以西、バイカル湖間に約３万、沿海州、ハバロフスク及びその以南に約１万５千、その他黒竜江鉄道沿線の兵力を加えるときは５～６万を下らない。

② 目下ハルビン付近に集中して西進を準備している６～７千のチェコ軍は、前記３万の敵を撃破して、バイカル湖畔に前進し、その友軍を救出することは困難な状況にある。しかもこの目的が結氷期前に達成されない時は、チェコ軍は悲惨になるだろう。

③ 加えてチェコ軍救援の目的が失敗すれば、シベリア及び黒竜江州は直ちにドイツ・オーストリア人の蹂躙するところとなるであろう。

④ そこで先ず速やかにバイカル湖以東の敵を撃破することが必要である。これがため少なくとも５個師団、約１０万の兵力が必要とされる。

⑤ 列国の軍事代表者も異論はない。中でもアメリカの代表のごときは第一に賛意を表明している。

⑥ 本事件については、日本以外には出兵の任務に当たり得ない。そこで我が国は断然、今日のような中途半端な処置を排除して、速やかに確固とした決心をして、第１２師団のみでなく、少なくとも５個師団を出動させ、もってハバロフスク、ハルビンの両方面から殺到して敵を撃破し、速やかにバイカル以東に立脚地を確立することが極めて必要なことと確信される。

政府は大谷司令官の報告を待機していたものの如く、すでに寺内首相によって示唆された予定の行動の実行に着手した。第１２師団の残り１万を沿海州方面に派遣することを決定し、別にザバイカル方面に第３師団、２万を派遣することに決定した。

１９１８年７月になると、シベリアのボリシェヴィキとチェコ軍の対決が報道された。又、ウラジオストクで、チェコ軍が市の行政機関を武力で占領するという事件が発生した。

これらの事実は８月２２日にアメリカ側に通告され、「チェコ軍殲滅の危機」と「チェコ軍救援の目的」とが強調され、今回の日本軍増遣は共同出兵の「合意」に副うものであることが繰り返し説明された。

しかし日米外交の対立がようやく激化し、現地における日米両国派遣軍の間の摩擦も激しくなった。あくまでも「限定出兵」の基本線を固執するアメリカ軍司令官と、「全面出兵」を基本方針と心得る大谷日本軍司令官との間に、「対立」が発生するのは当然の成り行きであった。そして軍事的行動は自己回転を始め、次第に膨張化していった。それとともに軍事的要求の前に外交の機能は従属化し、「二重外交」はいよいよ明確な形態をとるのであった。

かくして予定の３ケ月たつことなく沿海州の派遣軍は９月１８日、ブラゴヴェシチェンスク（ソ満東部国境の町）を占領、一方ザバイカル方面に進撃した軍団は９月６日に「チタ」を占領し、更に北方のニコライエフスク（尼港）にも９月９日、陸戦隊は上陸していた。９月１日に西部シベリアの友軍との連略に成功したチェコ軍もウラルに向かって進撃を開始した。

作戦の発展に平行して日本軍の増強部隊は繰り出され、１０月末、すでに寒気の厳しいシベリアの原野には、７万２千（北満の１万２千を含め）に上る日本軍が戦闘任務に従事していた。

その頃、欧州ではドイツの敗戦が決定的となつており、ほどなく休戦、かくしてチェコ軍救援を名分としたシベリア出兵は、本来付与された使命を失い、それとともに日本の野望が露出てくることになった。

出兵後の時代は、「ドイツ・オーストリア東漸論」でボリシェヴィキを説明できた時代と異なり、ボリシェヴィキ政権は明確な「敵」となった。しかもそれは単に軍事的な敵対者でなく、軍事衝突がおさまっても、恒常的に日本にとってイデオロギー上の敵となるという認識が確立した時代である。

この事態にアメリカ政府は、１１月１６日、厳重な抗議を日本政府に向けて発した。かくして数年後のワシントン会議、更に満州事変を経て、太平洋戦争の破局にいたる日米両国の深刻な対立、闘争はその源流に新しい流れを注いでいた。

シベリア出兵は戦争か如何か？

シベリア出兵は「チェコ軍救援」と「ロシア国民への救済」を掲げた出兵となった。アメリカは「YMCA」や「赤十字社」を使い、対ロシアの非軍事的な事業では日本より先んじていた。日本軍はアメリカ軍が種々の援助活動をしているのを傍観している訳にはいかなかった。

シベリア出兵の大義は、日清・日露のような大義とは違い、「出兵」を「戦争」と言えなかった。しかし召集された日本兵は万歳の歓呼の声で送られており、ロシアは「敵国」ではないと言われても理解できなかったのは無理はない。

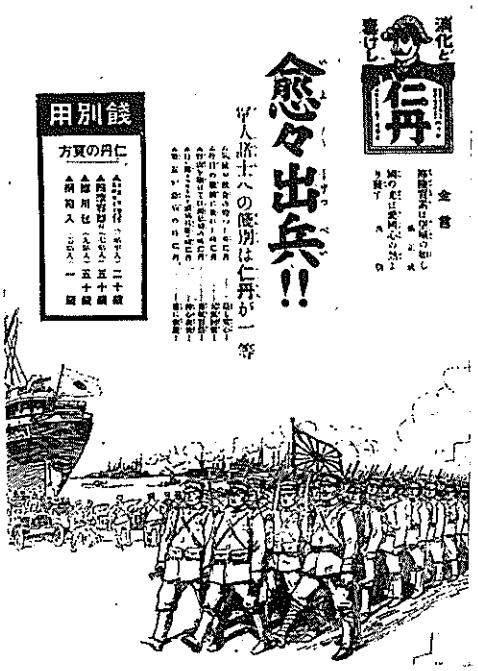
一方ではボルシェヴィキとの戦闘に参加し、他の一方では「廉売」、「施薬」、「慈恵医院」を行わなければならなかったから、これまで日本が経験したことのない出兵であった。

出兵は当初使われていた「ドイツ・オーストリア東漸論」が破綻して「ロシア救援」などの言葉が使われ、ロシア人のボリシェヴィキ軍と戦いながら、ロシアとの戦争ではないとの表現が使われたのである。

先ず行ったのは住民の支持獲得のために生活物資の供給であり、１９１８年９月には麦粉、砂糖、食塩、茶などの供給を開始した。

又、日本への支持を求めるには物資の供給とともに、親日宣伝が重要視された。日本はロシアを侵略するものではない、という宣伝を行った。しかし、ロシア人の反応には明らかに１０年前の日露戦争の敗戦の記憶があり、日本軍の労役要求も拒否していた。

医療援護も重要視され、特にザバイカル地方の医薬品の欠乏は著しく、「チタ」市では街頭で赤十字の腕章を見ると、診察を懇願したと言う状況であった。



〔右上の写真は当時の新聞に掲載された「仁丹」（現在の森下仁丹）の広告『愈愈出兵！！』〕

上記したように日本軍の救急援助も効果は少なく、ロシア側の抵抗を呼んだ。病院を開放して住民を無償で治療しても、日本人に好感を持たず、ロシアは満州や朝鮮ではないのであった。

第一次世界大戦終結によって、対ドイツ・オーストリア戦争の大義が消失すると、出兵にボリシェヴィキは敵対し、反革命派を支援する戦争という性格が露骨に現れた。

１９１９年２月、第１２師団第７２聯隊の大隊が「ユフタの戦」で、ボリシェヴィキ軍に包囲されて壊滅された事件が発生した。新しい救世軍のような日本軍の行動が、このような大規模な軍事衝突に遭遇し、１９２０年、外交官や居留民が大量に殺害されたニコラエフスク事件（２頁参照）のような、ロシア側の日本人虐殺という悲劇を起こす一里程となりつつあったのである。

シベリア出兵を『八幡の藪知らず』と呼ぶ人もいる。その意味は、「八幡の藪に入って出口が分からなくなったことから、物事に迷いが生じ、どうしょうもなくなること」である。ボリシェヴィキ政権の後身、ソヴィエト社会主義共和国連邦も今はない。チェコスロバキアも、スロバキアの独立で消滅した。何れの国にも私は足跡を残しており感慨無量である。

シベリア出兵のあとがき

第一次世界大戦の終盤近く、ロシアに革命が発生、やがて過激化し、レーニンを指導者とするソヴィエト政権が成立すると、西欧列強は資本主義体制の否認を唱える革命政権の出現に反発し、ロシア北部、南部、東部の地域で、反過激派政権を擁立するための軍事干渉に乗り出していた。このうち東部の極東ロシア、シベリア方面では、日本軍が多国籍軍の一員として参加し、四年三ケ月にわたり作戦行動に従事した。これがシベリア出兵であった。

このシベリアを舞台に展開された共同軍事行動は、ロシア革命に対する武力干渉という意義を帯びるものの、主要参加国はそれぞれ独自の目的をこれに付着させている。特に英仏の場合は、第一次大戦の激闘のさなかの革命であり、「東部戦線」の維持、あるいは再建という戦略的観点が優位していた。だからシベリア出兵の主導権をとったのは英仏であった。

これに対して日本の場合、特に日本陸軍にとっては、ロシア革命の勃発と極東ロシアでの「力の真空」状態は、国防上の宿願である「北辺の脅威」を払拭し、さらに北満州らシベリアにかけて、日本の勢力拡大を図る「一大好機の到来」と把握された。

一方、アメリカの政治指導者にとっては、日本がロシア革命の機会に乗じ、膨張的な大陸政策を、この地域で積極的に展開するのを抑止するのが、シベリアでの干渉政策を決定、実施する上で考慮すべき要因となった。

『日露戦争で弱小国日本が世界の陸軍大国ロシアに勝利して以来、アメリカは日本の台頭を警戒していた。反対に勝利に酔った日本は経済力は劣勢でありながら、満州・シベリアに対する領土的野心があったと思われる』

このように、シベリアでの武力干渉への思惑の相違から、容易に連合干渉の決定に踏み切れずにいた連合国に、出兵に向けての共通の「大義名分」を与えたのが、シベリア鉄道沿線各地で危機におかれた「チェコ軍の救援」であった。それから、アメリカの呼びかけで、日米連合軍が結成され、これを中核に英、仏、伊、カナダ、中国の軍隊が参加し、多国籍軍の干渉行動が始まったのである。

日米両国政府は１９１８年８月、シベリアへの共同出兵を実施するに当たって、派兵の目的、作戦範囲、軍隊の規模について、一応の「合意」を設立させていたが、派兵が実施に移されると軍事活動は自己回転を始め、日本軍の数も行動範囲も「合意」を無視した形で拡大して行った。当然、アメリカ側との間で摩擦が生まれた。加えて、日本軍が支援する反過激派分子は、アメリカ軍からは「無法者」視される連中であり、彼らをめぐって悶着が絶えなかった。さらに、アメリカ資本が伝統的に関心をもつシベリア、中東（東支）両鉄道の管理が問題となった。

こうして日米間で共同出兵が始まると、「強調面」より「対立面」の方が大きくなった。日本の軍事行動に対するワシントンの不満は、日本政府への公式の抗議通告となった。（１１月１６日）

翌１９１９年春、パリでベルサイユ講和会議が開催されていた頃、西シベリアの「オムスク」で、反過激派の「コルチャーク政権」が成立してウラル地域で進撃し、レーニン政権に対抗する力を誇示していた。連合国はコルチャーク政権を支持したが、アメリカは一地方政権だと同意せず、翌１９２０年初めにコルチク政権は空中分解した。

シベリアの多国籍軍はこれで解消し、撤兵を開始した。しかし日本政府は参加各国のように撤兵せずに、単独で駐兵することに決定した。この頃、発生したのが「尼港事件」であった。アムール河の河口に位置し、北洋漁業の活動拠点であるこの地で、日本軍の守備隊兵士と居留民、総数７００人がパルチザンの襲撃をうけ、惨殺された。この悲劇は日本国民に深刻な衝撃を与え、「尼港事件」はシベリア駐兵継続を正当化理由として、軍部が利用することになった。

しかし、大戦も終わり、チェコ軍も帰国し、多国籍軍も解体した状況下で、いったい日本はなぜ単独出兵を続けるのか、何が目的なのか、駐兵の大義名は何処にあるのか、といった根本問題について、内外から疑問がつきつけられていた。

そして現地の状況を見ると、日本軍の守備する鉄道が屢々パルチザン部隊の破壊攻撃を受け、反撃した日本軍が襲撃分子を追尾し、逃げ込んだ村落に焼き討ちをかけるといった種類の事件が頻発、無辜の住民に多大な犠牲を生んでいた。

加えて、日本軍の威をかる反過激派の「コサック兵」も悪事の限りをつくし、怨嗟の的となった。(コサックとはトルコ系部族で、草原を本拠とした強大な遊牧国家を形成し、帝政ロシアでは長槍集団突撃で勇名を馳せていた)

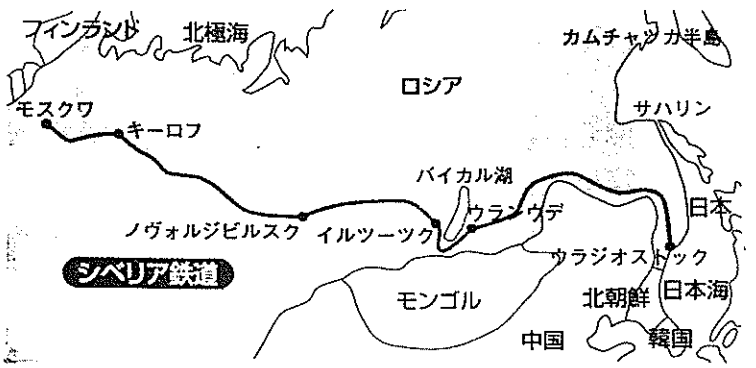
このように住民を敵にまわした「人民戦争」を極寒の地で戦い、夥しい人的犠牲と莫大な戦費を共同出兵と、それに続く単独出兵の二年半ものあいだ払いつづけ、そこで得たものと云えば、シベリア住民の日本に対する憎悪と悪感情であった。

日本軍のシベリアからの撤退を求める声は現地ではもとよりのこと、国際的にも、また日本国内でも、自由主義派の言論人や野党陣営の中に次第に高まっていった。「無名の師」と指弾されたシベリア派遣軍が、ついに撤退に踏み切ったのは、１９２２年（大正１１年）１０月であった。私はこの地方に１９７５年と１９８９年の２回にわたり訪れたが、この不毛の地に日本は領土的な野心があったのではないかと疑問を感じた次第である。

シベリア出兵の歴史は、日本軍部にとっては失敗の記録である。又、国際的威信を失墜した。昭和になり、その研究はいわばタブー視され、宣戦布告なきこの戦争において、日本が対外選択面でおかした誤りや、軍事行動の醜悪な一面に究明のメスを入れることは、少なかった。私も教育されたこともなく、戦闘記事などの出版物も非常に少ないのである。

しかし、この出兵は、次の世代にとって学ぶべき教訓を多く含んでいる。例えば、シベリア出兵の歴史について深い知識を持った軍人であれば、日中戦争の際にそれを活用し、反省の材料にしたかもしれない。一旦、派兵すると、撤兵がいかに困難な業になるか、シベリア出兵の際の単独出兵の歴史が良く物語っている。

大東亜戦争（太平洋戦争）に突入した１９４１年（私は中国戦線で中隊長として激戦を継続中）、戦争の回避をもとめたの日米交渉も、中国からの日本軍の撤兵問題や石油問題等で難航し、ついに暗礁に乗り上げて戦争となった。シベリア出兵の歴史に含まれる教訓は、今世紀に入ってから勃発した中東の戦争を考える上でも、役に立つはずでなかろうか。



シベリアの地誌

シベリアとは

シベリアはロシアの中部から東部にかけた広大な地域で、西はウラル山脈から東は太平洋岸まで、また北は北極海岸から南はカザフ共和国のステップ地帯の山地と、モンゴル共和国及び中国との国境までの北アジア地域の大部分を占め、面積は約１３８０ｋ㎡。アメリカ合衆国とヨーロッパ（ロシアを除く）を合わせた広さに匹敵する。

かってのロシア人にとっては、シベリアはウラルを越えたところであったが、彼らの東漸にしたがってその領域も拡大した。現在ではウラル山脈からエニセイ川までが西シベリア、その東方、太平洋斜面の河川の分水嶺までが東シベリア、それ以東は極東地方とされ、この極東地方はシベリアに含まれていない。

『自然』　地形上、西シベリア低地、中央シベリア高原、南シベリア山地、東北シベリア山地の４地域に大別される。分水界が南に寄っていて、北の北極海までが一帯に低地で、その間をオビ川、エニセイ川、レカ川など世界でも十指に入る大河が北に流れている。（３頁地図参照）極東地方の河川のほとんどは、約半年間凍結する。極東地方は主として山地からなり、東西に延びたアムール川（黒竜江）の河谷に平地が見られる。

『住民』　シベリア、極東地方の人口密度はきわめて低く、人口の大部分はシベリア鉄道沿線に集中している。古くからシベリア文化の中心であった「イルクーツク、オムスク」よりも、後発のノボシビルスクの方が人口が多く、ほかに主要都市としてウラジオストク、ハバロフスク、トムスク、ウラン・ウデなどがある。

原住民は数十にのぼり、中には１０００人以下の少数民族も含まれる。諸民族のうち人口の多いのはタタール族、ブリヤート族、ヤクート族などである。これら諸民族の言語はウラル語族系、モンゴル諸語系、ツングース諸語系、旧アジア諸語系など、きわめて多彩である。

『産業』　西シベリアは今やロシアの主要農業地帯の一つである。南部は大々的に開墾が進み小麦が作付けされている。ザバイカル地方の馬の飼育も有名で、木材は古くからシベリア、極東地方の主要産物であった。貯木量はロシア全体の７０％にのぼり、特にイルクーツク州、ハバロフスク地方で木材生産の伸び率が高い。

シベリアの製鉄業はウラル地方の鉄鉱石に依存して発展していたが、今ではシベリア各地に鉄鉱石が採掘されて製鉄所が建設された。非鉄金属の埋蔵量も多く、安価で豊富な燃料・電力を用いて非鉄金属工業も発展している。

燃料・エネルギー資源の開発は急速に発展し、世界の注目を浴びている。シベリアにおける石炭の埋蔵は、殆んどの火力発電所の燃料をまかなっている。西シベリアの石油の生産高は高く、ロシアのヨーロッパ部や東欧諸国にも送られている。東シベリアにも西シベリアに劣らない石油の埋蔵量があり、ロシアは世界有数の石油生産国となった。

天然ガスの産地が各所に発見されており、私も二回目のハバロフスクの訪問で、縦横無尽に走るパイプラインを見て、驚愕したのであった。シベリアの石油と天然ガスは無尽蔵で、末恐ろしい感じがする。

極東地方海域はロシア最大の魚場であり、サケ、マス、ニシン、タラ、サンマ、ヒラメなどの漁獲があり、カムチャッカ半島西岸、南サハリン、沿海州地方に加工場がある。私は平成５年（１９９３）にサハリンを訪れ、漁獲量の多いことに驚いた。

イルクーツク

ロシア共和国東部、バイカル湖西方６６ｋｍにあり、イルクーツク州の州都で、アンガラ川とイルクート川の合流率点に位置している。シベリア鉄道のほぼ中央にあって、交通の要衝であると同時に、東シベリアの政治・経済・文化の中心の一つでもある。

１６６１年、アンガラ川右岸の砦として建設され、８６年に市となる。１８世紀の初めからロシアの中国及びモンゴルとの通商上の通過都市として重要視され、１７６４年イルクーツク県の県都となり、１８０３年からはシベリア総督府が、２２年からは東シベリア総督府がこの町に置かれた。イルクーツク州の面積は７６万７９００ｋ㎡である。

帝政時代には政治犯の流刑地であるとともに、ロシア帝国地理学会員らによって積極的に文化活動が行われ、東シベリアの政治と文化の中心となった。又、１８世紀半ばには、日本人漂流民を教師とする日本語学校も開設され、ロシアの極東、カムチャッカ、北アメリカへの進出の拠点ともなった。

人口は１８２３年、1万５７００、５５年2万４０００、９７年5万１４００、１９１７年９万０８００、２６年9万８９００、３９年２５万０６００、５９年３６万６００と増加し、現在に至っている。現在の人口は不明だが、約５０万位ではないだろうか。

ロシア革命直後の１９１８年1月４日にソビエト政権が樹立された。１８年7月から１９年１２月までコルチャーク将軍指揮下の白衛軍に占領されたが、２０年1月２５日、再びソビエト政権下に復帰した。

イルクーツク市はアンガラ川、イルクート川、ウシャコバ川の三つの川によって四分され、市内のアンガラ川には水力発電所がある。産業は各種工作機械の製造を始めとして、金やダイヤモンドの採掘、鉱物資源の精錬、旋盤やプロペラシャフトの製造、電気製品のための雲母の加工、建設等の各種の工場がある。軽工業分野は食品、家具、皮革、繊維産業が発達している。

イルクーツク市は東シベリアの文化的中心で、ロシアや連邦科学アカデミー・シベリア支部に属する各種の研究所のほかに、１９１８年に設立された総合大学、工科大学、農業大学、教育大学、外国語大学、経済大学、医科大学等がある。

劇場としては、ドラマ、ミュージカル・コメディ、青年、人形劇のために四つがあり、交響楽団、サーカス、テレビジョン・センター、プラネタリウム、博物館、美術館もある。

気候は大陸性で、イルクーツクの月平均気温は1月－２１℃、7月は１７～１９℃。雨は少なく年間降水量は３５０～４３０㎜で、その大部分は夏の後半から秋の初めにかけて降る。１年のうち１６０～１７０日が雪で覆われ、植物の育成するのは１１６～１２７日である。

人口の８７％はウクライナ人、白ロシア人、タタール人、チュバシ人もかなり多い。ブリヤート人は7～8万人いるが、そのうち約5万人はウスチ・オルダ・ブリヤート自治区に住んでいる。

バイカル湖

ロシア連邦シベリア南部に位置し、ブリヤート自治共和国とイルクーツク州にまたがる湖。チュルク語系の言葉で「獲物の豊かな湖」の意とされる。三日月状で長さ６３６ｋｍ、最大幅７９ｋｍ、面積3万１５００ｋ㎡、湖面標高４５５ｍ、最深点は湖面から１６２０ｍで、その位置はほぼ中央部にあたり、世界最深、水量は2万３０００ｋ㎥であり、透明度は４０ｍを越える。湖岸線はおおむね単調で、両岸は切り立った崖が多く、湖面から比高約１５００ｍの急斜面が聳える部分も見られる。

流入する３００をこえる河川の湖岸に形成する三角州（とりわけセレンガ川の造ったものが最も著しい）、雁行する西岸山脈の一部が湖面に沈んで島となったオリホン島、同じ原因で形成された島が東岸と繋がって陸繋島となったスビャトイ・ノース岬の突出などが、湖岸線の単調さを破っている。

バイカル湖は北東～南西方向に発達した大きな地溝帯に沿って形成されたもので、３段の沈降が行われて水をたたえるに至った。又、この沈降は今も続いていると思われ、まれに地震も発生する。

特徴のある湖盆形態は特異な地方風を発生させる。「サルマ」と呼ばれる風速４０ｍの北西風が秋から初冬にかけて吹き、風下側の岸を５ｍもの波高をもつ高潮が襲う。春秋の季節に結氷しないときは湖面の水温が高く、湖岸一帯の大気の冷却をさまたげるため、湖全体が一種のヒートアイランドを形成するので、湖岸はイルクーツク市よりも気温が１０度ｃほども高い。表面水温は最暖月（８月）で９～１２℃（湖岸では２０℃に上昇し、遊泳できる）、１～５月には氷結する。

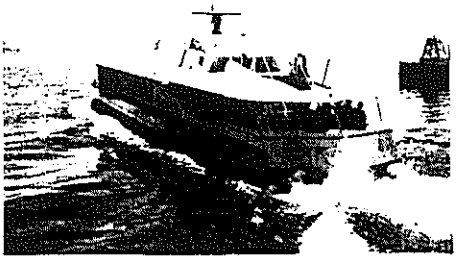
湖は第三紀に海から切り離されたため、湖棲生物には多くの固有種が見られる。最も著名なものは淡水にすむバイカルアザラシ、胎生魚ゴレミャンカ（カジカの一種）である。オームリ（サケの一種）、ハリウス（カワヒメマス類）などの漁獲もあるが、前者は数年間ごとの禁漁期間を設け急減を避けている。

バイカル湖の水は西端に近いリストビャンカ村とバイカル市の間から、北西にアンガラ川となって流れ出る。リストビャンカ村にはロシア連邦科学アカデミーの湖沼学研究所、ボリショイ・コトにイルクーツク大学付属水棲生物研究所がおかれている。ロシア政府は１９６９年に環境保護と自然の適正利用に関する特別法を制定した。

主な港は、バブシキン、バイカリスク、スリュジャンカなどである。

バイカル湖は１６２０年代からロシア人に知られたと考えられる。多くの詩や民話を生んだが、特に老酋長バイカルと長女のアンガラの物語はよく知られ、湖尻近くにある巨岩はバイカル老人の投げたものとされている。

下の写真はバイカル湖の景観
左下は湖畔の貧しい農家の家屋
右上は本文の物語の巨岩が見える
（中央の下側の渦）
右下は游覧船の出港の景観

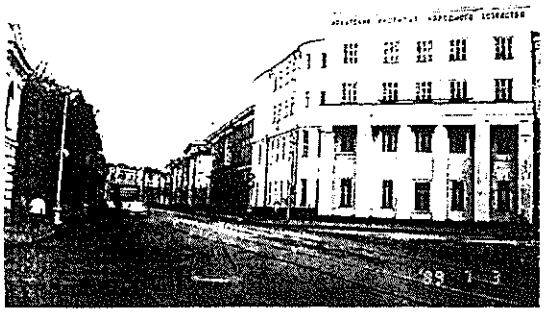


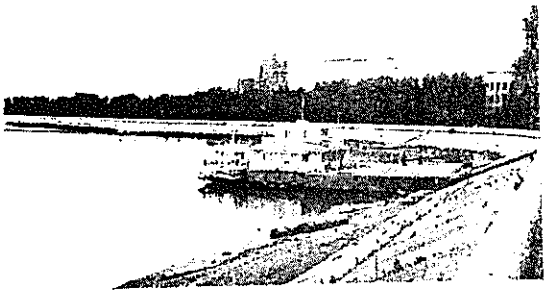
イルクーツクの景観

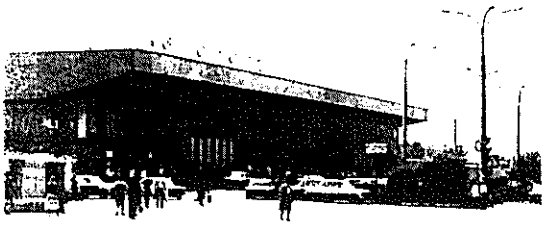
１９８９年7月２日

左上より
早朝の市中心部の風景
レーニン広
イルクーツク空港

右上より
遊覧船とホテルの遠景
市中心街の古い町並み
カトリック教会の一つ
協会の数は多い







ウラン・ウデ

ロシア共和国の東部（3、１１頁地図参照）、バイカル湖の東方７５km、シベリア鉄道の沿線にあり、モンゴル共和国に通じる鉄道・自動車道の起点で、モンゴルとの貨客輸送の要衝として知られている。シベリア出兵時の日本軍の派遣軍司令部の置かれた地でもある。

セレンガ川とウダ川の交流点にある河港で飛行場もあり、私は乗り継ぎ便の飛行機を約２０時間も待たされた苦い経験の味わった地で、印象の深い土地である。

１６６６年に「コサック」の越冬基地として始まり、８９年にできたベルフネウジンスク城塞の周辺に都市として発展した。（コサックとはロシア中央部から南東部へ流亡した定住集団。１６世紀頃に自治的騎馬戦士集団を形成し、騎兵としてロシア政府に仕え、中央アジア、シベリア、極東へ殖民し、辺境防備に当たった。カザーク、カザック、コザックとも称す）

１９世紀の後半にはザバイカリエの一大商業中心地であった。１９２０年に極東共和国の首都、２３年にブリヤート・モンゴル自治共和国の、５８年にブリヤート自治共和国の首都となる。（ブリヤートはバイカル湖の東部と南部に位置した）

機関車、ガラス、羅紗の各工場と肉製品コンビナートがある。獣医、教育など四つの大学のほか、価額カデミーのブリヤート支部が置かれ、インド・チベット医学の研究も行われている。ブリヤヘト文化を継承する劇場、博物館などの施設も多い。１９３４年までベルフネウジンスクと呼んでいた。

チタ

ロシア共和国の東部（3頁地図参照）、同名州都。１６５３年よりインゴジンスコエ越冬部落として知られるようになった。１７０６年にチティンスコエ村と改称、コサックおよび毛皮獣狩猟者が多く住んだ。

１９世紀前半にはデカブリストがこの地で苦役に服したことで有名になる。デカブリとは、１２月の意味である。１８２５年１２月、ペテルブルクで農奴制度廃止と立憲政治の実現を要求して、武装蜂起したロシアの自由主義者たちのことである。対ナポレオン戦争で自国の後進性を痛感した貴族出身の青年将校が主体であった。１２月党ともいう。

１８５１年に市となり、ザバイカル州の行政の中心となった。１９００年にはこの町を通るシベリア鉄道ザバイカル線が建設され、工業、とくに金の採掘と林業が盛んとなる。

０５年の革命に際しては、兵士・コサック代表ソビエトが結成され、０５年１２月から０６年１月にかけて「チタ共和国」が樹立されたが、政府軍によって壊滅させられた。十月革命後の１８年９月から日本軍と白衛軍（セミョーノフ軍）によって占領されたが、２０年１０月、パルチザンによって奪還され、２２年１１月まで「極東共和国」の首都となった。

以後、ロシア東シベリアの産業・文化の一中心として成長し、機械製造、自動車組み立て、食品加工、家具製造などが盛んである。

ハバロフスク

ロシア共和国の東端、ハバロフスク地方の中心都市。アムール川とウスリー川の合流点に位置し、ロシア極東の交通の要所である。

１７世紀のロシアの探検家ハバロフの名にちなんで１８５８年、ハバロフカ哨所として建設された。８０年に市となり、沿海州の行政の中心となる。９３年にハバロフスクと改称、９７年にウラジオストクと鉄道（ウスリー線）で結ばれた１９１６年にアムール川沿いの現在のシ

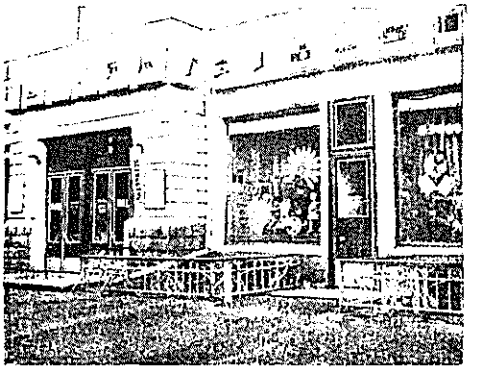
ベリア鉄道が完成し、ウラル以西と結ばれた。ロシア革命後の１８年から２０年にかけて日本軍および白衛軍に占領されたが、２２年１１月にソ連領になる。第二次世界大戦後は機械製造業、金属加工業を中心とする一大工業都市となり、ディーゼル機関、船舶、石油製品、工作機械などの工場がある。７月の平均気温は２０、２℃、１月は－２３、１℃。

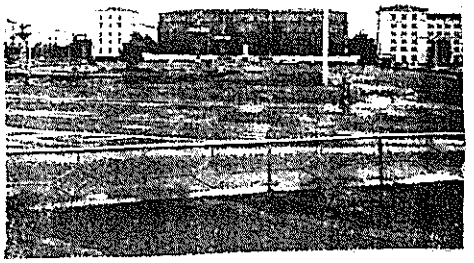
私は１９７５年と８９年に足跡している。印象としては貧しい都市の感じであった。米ソ対立が厳しかった時代で飛行場には戦闘機が待機していた。トイレットペーパは脱色せず茶褐色で、市民生活は日本と雲泥の差があり、百貨店も名前だけで品物は極端に少なかった。

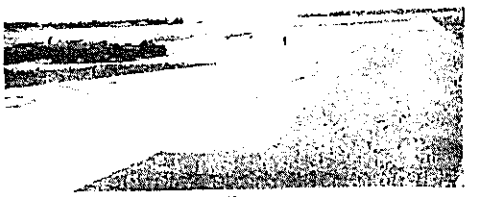
ハバロフスクの景観（１９７５年7月１０日現在）

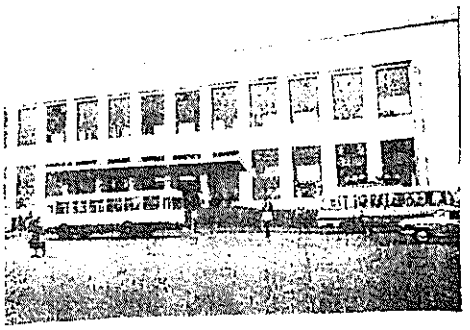
左上は博物館前に並べた戦利品
（大砲類と各種火砲）
左中はレーニン広場とホテル
左下はハバロフスクの駅舎

右上は百貨店で品物も無く極貧状態
右中は飛行場。東西冷戦で戦闘機が
２４時間、待機中であった。
右下は東シベリアを発見した
ハバロフスク大隊長の銅像









ウラジオストク

ロシア南東端、沿海州の州都。日本海に面し、ムラビヨフ・アムールスキー半島の南端、金角湾の沿岸に発展した太平洋方面における同国屈指の港湾都市。『東方（ウォストーク）を征服せよ（ウラジ）というロシア語に由来する。中国名は海参崴。日本では「浦潮」「浦塩」と呼ばれてきた』

１８６０年にロシアの海軍基地として開かれ、１９世紀末～２０世紀初頭のロシア極東政策の活発化にともない、経済的にも軍事的にも重要性を増した。１９０３年のシベリア鉄道の開通によりロシアの中心部と陸路で直結され、同鉄道の終点として国際的意義が高まった。

革命運動の歴史でも、０５～０７年の第一次ロシア革命期にたび重なる軍隊の反乱が起こり、１７年の十月革命に際していち早くソビエト政権を樹立するなど、シベリアや・極東の情勢に大きな影響を及ぼした。また、１９世紀末に東洋学院が開校され、文化的中心でもあった。

日本との関係は密接で、明治初年から日本人の在住が知られており、１８７６年には日本政府の貿易事務館がおかれた。８０年代以後、長崎との間の定期航路の開設にともない、日本人居留民の数は増加し、２０世紀初頭には約３千人を数えた。

日露戦争の勃発でその殆んどは引き揚げたが、戦後まもなく復帰した。貿易事務館は、１９０７年に領事館、さらに０９年に総領事館に昇格した。また十月革命直後から２２年まで邦字新聞（浦潮日報）が刊行された。

かっては、また中国人と朝鮮人の居留民も多く、１９１０年の「日韓併合」以後は朝鮮独立運動の一大拠点でもあった。その戦略的重要性ゆえに、十月革命後の内戦期には反革命と外国干渉軍の拠点となった。

日本軍は１８年４月に陸戦隊を上陸させ、同年８月の本格的な軍事干渉の開始（いわゆるシベリア出兵）から２２年１０月の撤兵まで、ここに「浦潮派遣軍司令部」を置き、２０年までは連合国と共同で、以後は単独で市を占領した。その間、２０年４月に「革命軍武装解除」と呼ばれる作戦行動により、ロシアの革命派指導部と朝鮮独立運動とに大弾圧を加えたこともある。

日本軍の撤退とともに「極東共和国人民革命軍」によって解放された。日本軍の撤退までに日本人居留民も殆んど引き揚げた。その後。２５年の日ソ基本条約締結にともない、同年に日本の総領事館が開かれた。　（右の写真は当時の浦潮派遣軍司令部の建物）

港は１１月から３月まで結氷するが、砕氷船の使用で冬季も使用可能である。今日、貨物取扱量では「ナホトカ」に次ぐとはいえ、ロシア太平洋艦隊の基地、商港、漁港として重要な位置を占めている。造船、水産加工を始めとする工業の中心でもある。また化学アカデミー・シベリア支部・極東科学センターと各種研究所、東洋学院の後身である大学をはじめ、多くの学術・教育機関が置かれている。

その他の事項

シベリア鉄道

モスクワからシベリアを横断してウラジオストクに至る鉄道幹線の通称である。９２９７km の鉄道を敷く考えは、ロシアが太平洋岸を領有するに至った１９世紀半ばからあったが、当初は人口希薄な地域に数千kmの鉄道を敷くことは全くの夢想と考えられていた。

実際に着工されたのは１８９１年で、これは極東への西欧諸国の進出が積極化し、ロシアもこれに対抗しようとする戦略的意味が大きな契機となっている。

工事はウラジオストクとウラル山脈の東側チェリャビンスクの両方から進められたが、経費は乏しく、冬季は酷寒であり、人跡未踏の地域も多く、工事は困難を極めた。路線短縮、満州（中国東北）への進出企図などから、チタから真っ直ぐにウラジオストクまで満州を横断する、ロシア鉄道と同一軌幅（1、524）の東清鉄道線を建設することを清国政府に承認させ、１９０３年これを完成した。

０４年に始まった日露戦争では大量の兵員、武器をヨーロッパ・ロシアから極東へ輸送する必要から、シベリア鉄道の輸送力は増強され、未完成だったバイカル湖迂回線部分もこのとき開通し、ヨーロッパとアジアが初めて連続した線路で繋がれた。アムール川と並行してロシア領内を通る現行の路線が開通したのは１６年である。

ロシア革命につづく国内戦、日本軍を主力とする連合国のシベリア干渉戦争（シベリア出兵）は、シベリア鉄道に甚大な損害を与えた。多くの機関車、車両、橋梁、線路が破壊された。今でも幾つかの駅には、連合軍と戦って死んだロシア人の碑が残されている。この打撃からシベリア鉄道が回復するのは２５年ごろである。

１９２０年代に始まったソ連の工業化政策では、輸送力の増強がその基礎を成していた。２７～３１年、中央アジアとシベリアを結ぶトルクシブ鉄道も建設され、３７年にはシベリア鉄道の全線が複線化された。

第二次大戦後、５０年代からのシベリア開発の本格化にともない、鉄道の整備強化も奨められた。５５年に始められたシベリア鉄道の電化は、現在は完成している。厳冬期には－３０℃以下になるシベリアでの輸送効率を維持する上で、またその経済性からも、大きな役割を果たしている。レール、枕木、信号体系なども改善され、多くの支線も各地に伸びている。

シベリア鉄道は、開通してから航空機にその地位を譲るまで、ヨーロッパとアジアを結ぶ最も速い交通路の地位を占めてきた。１９３４年の急行「リュクス」は満州里（マンチュリー）から当時のソ連の西の国境、ストルブツィ（ミンスク南西78km）まで９日間で走った。

現在のウラジオストク（外国人旅行者の場合はナホトカ）～モスクワ間は急行で８日間かかる。７０年代から２０ｔ積みのコンテナー輸送も始められ、特に日本とヨヘロッパ間の輸送量が増大している。

シベリア抑留

第二次大戦終結時にソ連軍に降伏・逮捕された日本軍人その他が、シベリアで強制労働に従事させられた。その大部分は関東軍軍人で、これに樺太・千島・北朝鮮で武装解除された部隊が加わり、その数は日本政府の推定で５７万５０００余人とされている。軍人以外では満州国官吏、国策会社、殖民地統治機構、協和会、新聞社などの幹部役職員など、約１万２２００人が含まれている。

ポツダム宣言第９項は、日本軍隊の郷里への帰還を約束したが、ソ連は上記した人員をシベリア（４７万２０００人）、外蒙古（１万３０００人）、ヨーロッパ・ロシア（２万５０００人）と、約１２００ケ所の捕虜収容所・監獄に収容し、土木建築、鉄道建設、採炭、採鉱、生産工業に従事させた。第２シベリア鉄道建設事業に日本人５万人が投入されたのは有名である。

収容所の多くは酷寒の地にあり、栄養・衛生状態が劣悪なうえに高度な労働規準（ノルマ）が課せられたため多くの死者・病者を出した。収容所内での私的制裁や「民主運動」も広がり、映画化された「暁に祈る」「吊し上げ」などが行われた。

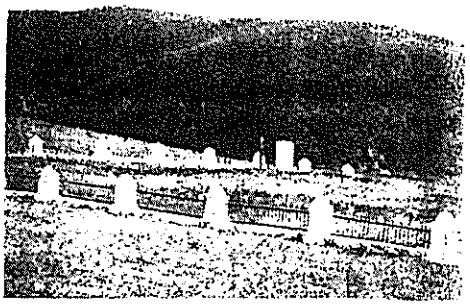
短期抑留者の帰国は１９４６年１２月に始まり、５３万人弱が送還された５０年４月、ソ連は引揚げ完了を声明した。

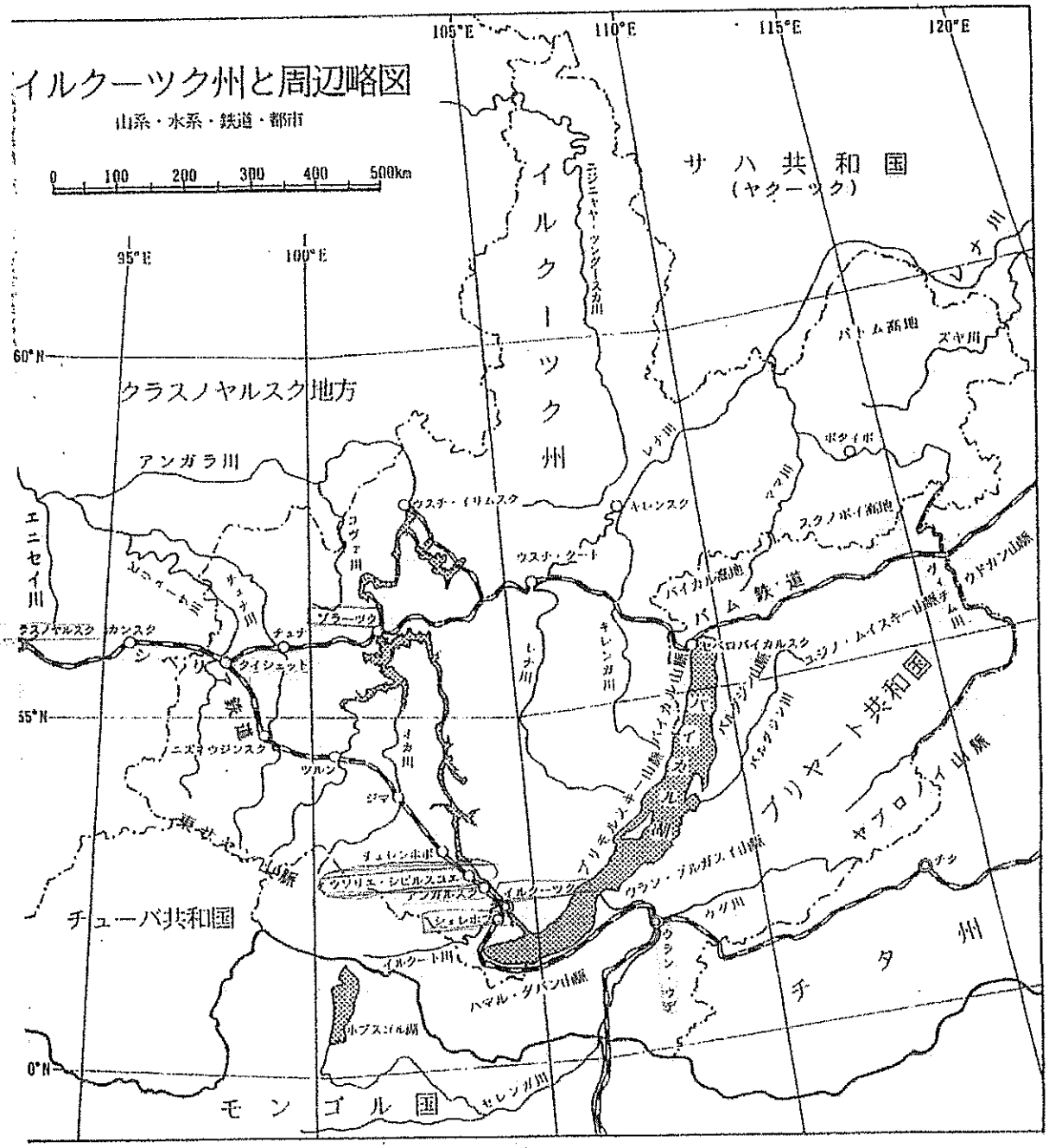
アメリカ、イギリス、オーストラリアは冷戦の一環として残留者の調査と送還を迫り、８月、国連に捕虜特別委員会が設けられた。５６年１２月、日ソ共同宣言成立とともに有罪判決を受けた総ての日本人が釈放され、同月長期抑留者２６８９人が帰国した。若干名はソ連に帰化したとされる。抑留者名簿は不十分で行方不明者も多いと言う。

左下の写真はハバロフスク郊外の山林の中に埋葬されている日本人墓地

右の上下の写真はモンゴルの首都のウランバートル郊外の丘に祀られている日本人墓地

『共に１９８９年６月参拝』





イルクーツク州と周辺略図

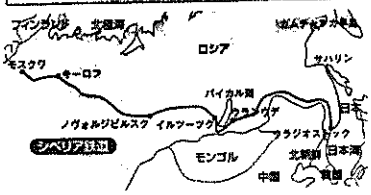
ウソリエ・シビルスコエ市　107,000人

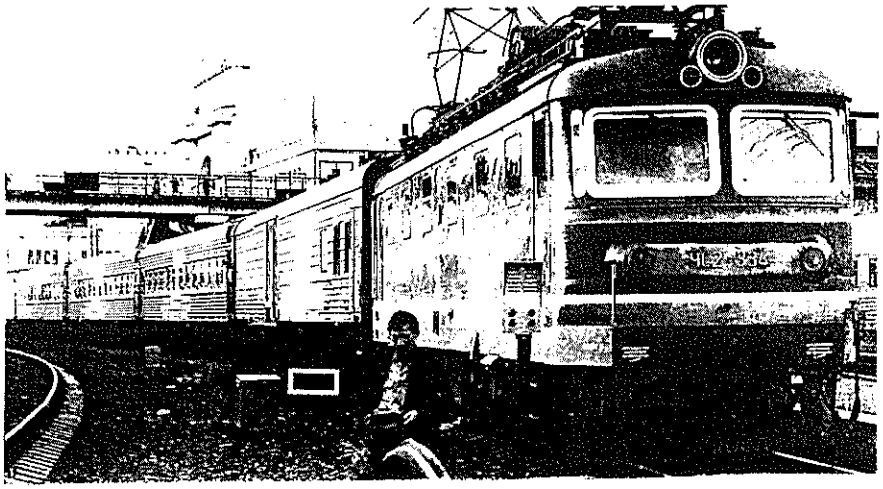
この町の名は、<シベリアの製塩所>と覚えればよい。製塩所があれば、豊富な岩塩を原料とする化学工業も興される。製薬工場や生産公団「化学工業」の存在は、その延長線にあると考えられる。しかし、この市を有名にしているのは、何といっても鉱泉泥浴療法の保養地<ウソリエ>である。1848年に開設され、対日（1905年）および対独（1915～1916年）戦線で負傷した兵士も傷を癒したこの保養地は、イルクーツク市から70km離れたアンガラ川の左岸、海抜約400mの台地に広がっている。運動機能・神経系統疾患、婦人病の治療のために、塩基類を含む鉱泉が温水浴・シャワー浴に用いられるほか、リハビリホールや近代的機器を備えた理学療法、さらにダイエット（食餌）療法も行なわれている。ヨーロッパの療養保養（クア）地がそうであるように、ここでも講演会や演奏会、アマチュア・サークルのコンサート、史蹟見学の遠足などが随時催される。「クラブ」では映画が常時上映されており、夜には舞踏会も開かれる。図書館・郵便局・国際電話局・理髪所・運動場・切符前売所もあって長湯型療養地とはならない。

ユーラシアの鉄道図

〈シベリア鉄道のミニデータ〉

- 全長：9288km(ウラジオストク～モスクワ間)
- 所要時間：約150時間(6泊7日)
- アレクサンドル3世の命で、1981年起工。
- 1901年バイカル湖の区間を除いて(夏はフェリーによる連結、冬は湖上に線路を敷いて列車を走らせた)一応完成。日露戦争の最中1904年9月に全線開通。
- ハバロフスク駅の時計には短針が2つ。黒はハバロフスク時間、赤はモスクワ時間。2都市の時差は、何と7時間!



アジアとヨーロッパをつなぐ、世界一長い線路

シベリア鉄道